九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

擬音語の擬態語化についての日中対照研究 : 日本語「ABAB」型オノマトペ両用語と中国語「ABB」型形容詞を例として

趙, 寅秋
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/1430884

出版情報：比較社会文化研究. 35, pp.41-51, 2014-02-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第35号（2014）41～52
Social and Cultural Studies
No.35（2014），pp. 41～52

擬音語の擬態語化[1]についての日中対照研究
―日本語「ABAB」型オノマトペ両用語[2]と中国語「ABB」型形容詞を例として―

趙（チョウ）　寅秋（イン シュウ）

1.はじめに

一つの語が擬音的な意味と擬態的な意味の両方を持っているオノマトペは、日本語においては特殊な語彙のグループであると言えるのに対し、中国語では、日本語とは異なり、一つの語が、擬音語として使われるか擬態語として使われるかの境界線が明確であり、判断しやすいため、無関係のように見える。これまで、擬音語・擬態語の日中対照研究においてはオノマトペを中心に、その音韻や形態、または対訳研究がほとんどであり、擬音語と擬態語の間にどのような関連があるかについての研究はまだ多くない。そこで本稿では、擬音的な意味と擬態的な意味の関係に焦点を当て、日本語ABAB型オノマトペ両用語と中国語ABB型形容詞を例として、認知的な手法を用い、日中両言語における擬音語の擬態語化について対照したい。

2．先行研究の概観

2.1　日本語における擬音語と擬態語の研究

2.1.1　音韻（音象徴）と形態の面からの考察

これまでの日本語の擬音語・擬態語（以降、オノマトペ）の研究としては、まず、音韻（音象徴）の面からの考察がある。例えば、沖田（1996）と石黒（2008）は、音象徴はオノマトペの持つイメージ喚起力の源であり、オノマトペは音声と意味の有契的な類似記号であると述べている。また、田守（1991）、田守・スコウラップ（1999）および野間（2008）は、日本語オノマトペは音象徴語とも言え、子音と母音が象徴性を持っているため、オノマトペの意味はある程度音象徴性によって限定されていると主張している。次に、オノマトペの形態について、金田一（1978）、田守・スコウラップ（1999）、角岡（2007）は、日本語におけるオノマトペの形態は主に1モーラ（一拍CV）あるいは2モーラ（二拍CVCV）の基本形を語基として、それに促音、撥音、長音を付けたり、語基を反復させたりすることによって形態を豊富にさせると述べている。その中で、ABAB型オノマトペは2モーラを反復させる形であり、数も最も多く、オノマトペの代表的な形とも言える。

2.1.2　共感覚の面からの考察

オノマトペには、共感覚の現象が多く存在している。例えば、苧阪（2008）と有働（2002）は、擬音語・擬態語が人間の感覚的認知のもととなる五感に由来し、聴覚、視覚や触覚という感覚に根ざした感性語であると主張している。矢口（2011）はオノマトペを用いた共感覚的表現の意味理解構造に注目し、二つの実験を行った。結果としては、選定されたオノマトペ語彙は五感のいずれかと関連し、修飾語として用いられる場合、低次感覚から高次感覚への修飾が可能であることが解明された。また、大澤（2007）では、共感覚の一方向性という特性はすべてのオノマトペに適用できるわけではなく、音声を表す語彙は共感覚を介して他の感覚を表すことができると主張されている。

2.1.3　意味拡張の面からの考察

擬音語と擬態語の研究に関しては、近年、認知言語学の知見、特にメタファーとメトニミーに基づく認知的な手法が用いられたものが多くなってきている。例えば、呂(2004)は、認知的な視点に基づき、意味的に類似する日本語オノマトペ「ころころ」と中国語の形容詞の「圓滚滚」を例として、その多義性をもたらす認知的なメカニズムについて対照し、その結果は次の通りである。まず、共通点としては、両者はともに具体的な様態から抽象的な表現まで広い範囲をカバーしており、その背後には日常的な経験を基盤とする百科全書的な知識のネットワーク、すなわちイメージスキーマによって支えられたメタファー・メトニミーリンクが観察され、オノマトペにおける比喩理解の普遍性が見られた。次に、相違点としては、日本語の「ころころ」は転がるというスキーマからCHANGE IS MOTIONというprimary metaphorが喚起されるのに対し、中国語の「滚滚」は転がる事態や沸き立つ事態の「勢い良さ」の側面がより際立つ。

伊東（2009）は、日本語の擬態語を中心に、擬音語から拡張されたもの以外に、いくつかのスキーマから拡張された場合もあると主張している。例えば、「くらくら」、「ぐ

らぐら」、「ふらふら」、「ぶらぶら」において、「左右の揺れ」という共通的な意味があり、これを基本義と定義し、実際に不安定にゆれる様から「頭がくらくらする」や「ぐらつく」などのように目に見えない痛みや気持ちに拡張した。この基本義をスキーマとして、上述の例はこのスキーマの具現化、言い換えれば意味拡張と見なされている。

2.2　中国語における擬音語と擬態語の研究

2.2.1 音韻、形態および共感覚の面からの考察

中国語の擬音語と擬態語に関しては、日本語とほぼ同様に、音韻や形態、また、共感覚などの視点から考察されている。例えば、瀬戸口（1984）は日本語との対照から日本語と対応している中国語の擬音語と状態を表す語の形をまとめた。具体的には、擬音語は主に「A地」、「A地一下」、「AB」、「AA」、「ABAB」、「ABCD」という形であり、状態を表す語は主に「AABB」、「ABB」、「AA」のような形と、四文字熟語、内容語、副詞、および擬音語から拡張されたものであるとまとめている。一方で、音象徴の面については、野口（1977）によると、中国語にも音象徴があるが、日本語のような清音と濁音の対立しているものはなく、有声音・無声音（b･p/d･t/g･kなど）というものがあり、二音節からなる擬声語の子音の対応において、同じようなものが選ばれる傾向がある（例えば、「buleng」と「puleng」のように、bもpも共にlを選び、各々二音節語となり、意味的側面においても、日本語の清音「batabata」と濁音「patapata」のような対立は見出されない）。また、共感覚の面については、武田（2001）によると、日本語も中国語も、擬音語が共感覚を介して擬態語になり、この過程は擬音語の擬態語化であると主張されている。さらに、すべてのABB型形容詞は、BBが本来擬音語として使用され、メタファーを介してABB型形容詞に意味拡張したと武田（2001）も主張している。

2.2.2　ABB型形容詞

武田（2001）によれば、接尾語BBが本来擬音語として用いられるため、中国語ABB型容詞には擬音語と擬態語の関係が見られるはずである。しかし、中国語におけるABB型形容詞の研究は、接尾語BBとABB全体の関連性ではなく、ほぼ接尾語BBを中心に、BBの意味の有無、ABB型形容詞の構成の特徴、また、BBの修飾機能およびABB型形容詞全体の意味特徴についての考察が多くなされている。例えば、辛・周（1989）、邵（1990）、祝・劉（2001）、郝（2006a、2006b、2007）は意味の有無によってBBを二種類に分け、語根Aと組み合わせてAとの関係やAへの影響をまとめた。次に、鮑（1985）、李（1987）、楊（1999）、戴（1999）、薛（2005）、申（2006）によれば、ABB型形容詞における語根Aは多くが形容詞、名詞、動詞であり、接尾語BBはAを補充し、限定する機能を持っている。さらに、ABB型形容詞は普通の形容詞より物事を生き生きと描写することができるとも主張されている。

2.3　まとめ

以上、先行研究を概観してきた。まとめてみれば、日中両言語における擬音語・擬態語の研究は、主に音韻、形態、および共感覚の視点からのものが多いことが分かった。また、日本語オノマトペについて、擬音語と擬態語の関係の研究が少ないことや、中国語ABB型形容詞について、本来擬音語として使用される接尾語BBと状態しか表せないABB型形容詞全体との関係に関する考察がまれであることなども明らかになった。

3．研究の目的と方法

擬音語・擬態語は人間の認識と密接な関係にあり、また、言語形成の二つの段階ともいえ、両者にはメタファーとメトニミーという認知プロセスによる繋がっていると考えられる。しかし、先行研究から分かるように、これまでに擬音語と擬態語の関連性に関する考察はあまりなされていない。そこで、本稿では意味拡張の視点から、日本語ABAB型オノマトペ両用語と中国語ABB型形容詞における擬音語の擬態語化のプロセスを解明し対照したい。研究方法としては、まず、本稿の具体的な研究対象を選定する。次に、『中日対訳コーパス（2003版）』から、選定された研究対象が含まれる例文を検出する。最後に、具体的な例文に基づいて日本語ABAB型オノマトペ両用語と中国語ABB型形容詞における擬音語の擬態語化のプロセスについて分析して対照する。

4．研究対象の選定と例文収集

まず、日本語ABAB型オノマトペ両用語の選定に当たっては、表1に示している辞書を利用し、四つの辞書に統一した記述があるABAB型オノマトペ両用語を抽出した。

表1　日本語ABAB型オノマトペ両用語の選定に用いられた辞書

A	天沼寧（1974）『擬声語擬態語辞典』東京都
B	浅野鶴子（1978）『擬音語擬態語辞典』角川書店
C	阿刀田稔子・星野和子（1995）『擬音語擬態語使い方辞典－正しい意味と用法がすぐわかる』創拓社
D	小野正弘（2007）『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

例えば、「かさかさ」の抽出法は、表２の通りである。

表２　日本語ABAB型オノマトペの選定方法

類別＼辞書	A	B	C	D
両用語	おいおい おんおん **かさかさ**	うんうん おいおい おんおん **かさかさ**	うはうは うんうん がくがく **かさかさ**	うんうん えんえん おいおい **かさかさ**

まず、辞書A、B、C、Dから日本語ABAB型オノマトペ両用語をすべて抽出する。次に、表２のように、例えば、抽出された語には、「かさかさ」が四つの辞書すべてに存在するため、これを分析対象として抽出する。上述の方法で、研究対象である日本語ABAB型オノマトペ両用語を85個抽出した。その後、『中日対訳コーパス（2003版）』から、研究対象であるABAB型オノマトペ両用語が含まれる例文をすべて検出してまとめた。例えば、「からから」が用いられた例文は表3に示されている。

表３　日本語ABAB型オノマトペ両用語の例文（からから）

No	行番	破戒（原文）
1	975	枯々な桑畠の間には、その車の音がからからと響き渡って、随いて行く犬の叫び声も何となく喜ばしそうに聞える。
No	行番	黒い雨（原文）
1	362	「いつかも見たら、からからにした甕の底に川砂を入れ、スッポンに卵を産ませておった。しかし、とうとう卵は産まなんだそうな」
No	行番	ノルウェイの森（原文）
1	71	道の上には夏の終りに死んだ蝉の死骸がからからに乾いてちらばっていて、それが靴の下でぱりぱりという音を立てた。
No	行番	青春の蹉跌（原文）
1	278	リフトは二人を乗せて、新雪に埋められたきれいな斜面の上をからからと登って行った。
No	行番	砂の女（原文）
1	309	。しかし、いくら唾をはいても、口のざらつきはなおらなかった。口が、からからになっても、まだ砂は残っていた。
2	343	しまいに、口の中がからからになって、炎症でもおこしたように、ひりついた。

一方で、中国語ABB型形容詞の選定については、まず表4に示しているE、Fという二つの辞書に統一した記述があるものを抽出した。次に、抽出したABB型形容詞の接尾語（BB）が本来独立した擬音語であるかについてFとGで調べ、それが本来擬音語として用いられるものを最終的な分析対象として選出した（表４を参照）。

表４　中国語ABB型形容詞の選定に用いた辞書

E	相原茂・韓秀英編（1990）『現代中国語ABB型形容詞逆配列用例辞書』くろしお出版
F	中国社会科学院言語研究所詞典編集室編（2008）『現代漢語辞典』（第五版）商務印書館
G	野口宗親編（1995）『中国語擬音語辞典』東方書店

最終的に抽出した中国語ABB形容詞は58例であり、その一部は表５に示されている。

表５　接尾語BBは本来擬音語として使用されるABB型形容詞（接尾語別）

接尾語	吁吁	呼呼	飕飕	哄哄	呵呵	乎乎	碌碌	啦啦
例	气吁吁	气呼呼	冷飕飕	乱哄哄	笑呵呵	潮乎乎	骨碌碌	呼啦啦
	喘吁吁			闹哄哄	乐呵呵	热乎乎		哗啦啦

またその後、『中日対訳コーパス（2003版）』から、選出されたABB型オノマトペが含まれる例文をすべて検出した。例えば、接尾語「烘烘」が用いられた例文は下の表６の通りである。

表６　中国語ABB形容詞の例文（接尾語BBは「烘烘」を例とする）

No	行番	活动变人形（应報）
1	916	抽了两烟袋烟、又拾起了因为抗议而中途捻灭了的劣质纸烟。臭烘烘的烟她终于吸完了。她开始默念唐诗： （キセルを二眼吸った時、文句がでて途中でもみ消した安タバコをまた取り出し、臭い安タバコをついに吸い終わると、唐詩を口ずさんだ）
No	行番	骆驼祥子（駱駝祥子）
1	989	“我就不许你混身臭汗，臭烘烘的上我的炕！” （「汗臭いからだ横にはいってこられるのなんかまっぴらだ。」
No	行番	轮椅上的梦（車椅子の上の夢）
1	3013	下午，风势息弱了，太阳暖烘烘地照耀着大地，……（昼過ぎ、風が弱まり太陽がポカポカ大地を暖めると、…）
No	行番	霜叶红似二月花（霜葉紅似二月花）
1	1556	亲友们也都助兴，都送了礼物。从昨天起，黄府上就充满了暖烘烘闹洋洋的空气，这是向来少有的。 （親戚や友人たちも心から祝ってくれ、贈り物をとどけてくれていた。きのうから黄家には、あたたかいうきうきした空気がみなぎっていた。）
No	行番	钟鼓楼（鐘鼓楼）
1	1570	大约刚有一屉三鲜馅包子出笼，从那包子铺里飘散出好一股诱人的暖烘烘的香气。 （ちょうどふかしあがったところとみえて、プーンと美味しそうな匂いがただよってくる。）
No	行番	轮椅上的梦（車椅子の上の夢）
1	196	我梳小辫的时候，它总是爱挤过来照镜子、每逢在镜子里看到一张毛烘烘的小脸儿，…… （髪をとかせば、いっしょに鏡をのぞきこみ、鏡の中に毛のふさふさした小さな顔を見つけて…）

５．日本語ABAB型オノマトペ両用語における擬音語の擬態語化

本節では、選定した日本語ABAB型オノマトペ両用語における擬音語の擬態語化について分析していく。

まず、例文に基づいて、「からから」を例に分析を進めていく。

(1) 枯々な桑畠の間には、その車の音がからからと響き渡って、随いて行く犬の叫び声も何となく喜ばしそうに聞える。
(2) 乾いた落ち葉が、風に吹かれて歩道をからからと転がっていく。
(3) しまいに、口の中がからからになって、炎症でもおこしたように、ひりついた。

(1) の「からから」は車が発する音を表す擬音的な意味である。次に、(2) の「からから」については、擬音的な意味（落ち葉が風や地面と摩擦して発する音）も少し感じられるが、主に擬態的な意味（落ち葉が乾燥している様子）になっている。実際に、(2) における「からから」は、既に音声からメトニミーを介して落ち葉という発声源の様子に焦点が移り[3]、擬音的な意味から擬態的な意味に拡張した。なぜならば、(2) には「からから」という音声の存在を明示する「鳴っている」、「音がする」などの用語がなく、また、音声を表す語を聞く瞬間に、その音声を発する物事全体の情報も想起させやすいからである。最後に、(3) における「からから」は擬音的な意味が完全になくなり、「喉が乾ききったさま」という純粋な擬態的な意味を表している。この意味は、(2) の「からから」が表す「落ち葉が乾燥している様子」と「水分不足」という点で共通しているため、(2) から更にメタファーを介して拡張されたものであると考えられる。このように、「からから」の擬態語化のプロセスを図示すれば、以下の図１のようになる。

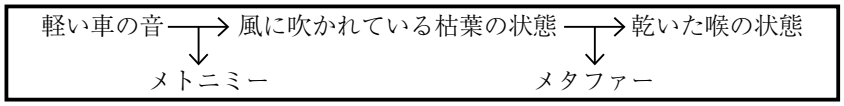

図１　「からから」の擬態語化のプロセス

また、「からから」と同様の擬態語化のプロセスを持つABAB型オノマトペ両用語の一般的な擬態語化のプロセスは次のように表すことができる。

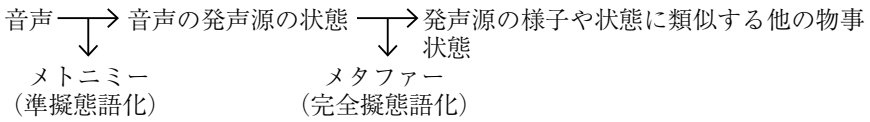

図２　パターンＡ

図２に示されている「準擬態語化」とは、擬音語が擬態語化された後もまだ擬音的な意味を伴うことを指す。「完全擬態語化」とは、擬音語が擬態語化された後、擬音的な意味が完全になくなることを指す。

次に、「ぐーぐー」における擬音語の擬態語化について見ていこう。

(4) 隣の部屋からぐーぐーと大いびきは聞こえてきて一睡もできない。
(5) 天真らんまんなあくびをされ、ぐーぐーとお眠りになられます。

まず (4) の「ぐーぐー」はいびきの音を表す基本的な意味である。(5) は前後の文脈からわかるように、主に眠っている様子を描写している。熟眠している時に、「ぐーぐー」という呼吸の音だけが聞こえるのではなく、その熟眠している様子も想起しやすい。したがって、(5)の「ぐーぐー」はいびきの音を表す意味からメトニミーを介し、この音を出す時のぐっすり眠っている様子に意味拡張した。「ぐーぐー」の擬態語化のプロセスは図３に示している。

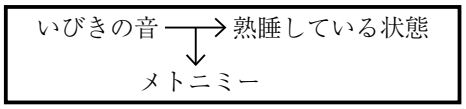

図３　「ぐーぐー」の擬態語化のプロセス

ただし、(5) のような文における「ぐーぐー」は擬音語か擬態語か断言しにくく、言い換えれば、「ぐーぐー」のような語は擬態語化されても安定したものではなく、完全に音声の伴わない状態を表せることがないため、擬態語化のプロセスは完全ではない。したがって、「ぐーぐー」と同様の擬態語化のプロセスを持つABAB型オノマトペ両用語の一般的な擬態語化のプロセスは以下の図４のように表すことができる。

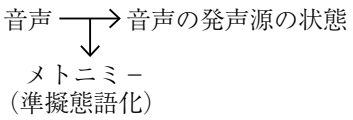

図４　パターンＢ

最後に、「かんかん」という例を見てみよう。

(6) 子坊主がかんかん鳴らす鉦の音を聞きながら、丑松は蓮華寺の山門を入った。
(7) 一方、こうした動きとは別に動物虐待だとかんかんになっているのは動物愛護協会。

まず、(6) の「かんかん」は鉦の音を表す。また、(7) の「かんかん」は非常に怒っているという意味である。「かんかん」の意味拡張のプロセスはパターンＡ（図２）とパターンＢ（図４）とは異なり、音声から音声の発声源に焦点が移るプロセスは存在しないが、音声を表す「かんかん」から直接怒りを表す「かんかん」に意味拡張する。なぜなら、(6) の「かんかん」は鉦の音が激しいという意味も含んでいるため、(7) における怒りが激しいということと類似しているからである。言い換えれば、(6) の「かんかん」が表す音声の激しさはメタファーを介し、(7) が表す怒りの激しさに意味拡張したのである。したがって、「かんかん」の意味拡張のプロセスは以下の図５のように示すことができる。

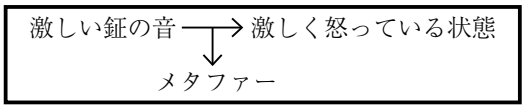

図５　「かんかん」の擬態語化のプロセス

また、「かんかん」と同様の擬態語化のプロセスを持つABAB型オノマトペ両用語の一般的な擬態語化のプロセスは図６のように表すことができる。

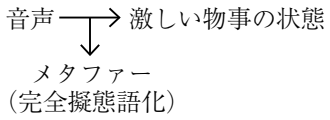

図６　パターンＣ

その後、他のすべての両用語における擬態語化のプロセスについても詳しく分析した。最終的な結果としては、表７に示している６つの主なパターンを発見した。

表７　日本語ABAB型オノマトペ両用語における擬音語の擬態語化のパターンと例

	パターン	例
A	音声 → 音声の発声源の状態 → 発声源の状態に類似する物事の状態 ↓ ↓ メトニミー（準擬態語化）　メタファー（完全擬態語化）	からから
B	音声 → 音声の発声源の状態 ↓ メトニミー（準擬態語化）	ぐーぐー
C	音声 → 激しい物事の状態 ↓ メタファー（完全擬態語化）	かんかん
D	音声 → 音声の発声源の状態 → 動作の結果 ↓ ↓ メトニミー（準擬態語化）　メトニミー（完全擬態語化）	ぴたぴた
E	音声 → 概念上では既に存在していた音声に関連する経験（状態）に類似するほかの物事の状態 ↓ メトニミー＋メタファー（完全擬態語化）	ごつごつ
F	A～Dの中の２パターンの組み合わせ、または、ほかのパターン	びりびり[4]

６．中国語ABB型形容詞における擬音語の擬態語化

中国語ABB型形容詞は、日本語ABAB型オノマトペ両用語のように語形変化せずに擬音的と擬態的な意味の両方を有するのではなく、ABB型形容詞は既に安定している擬態的な機能を持っている語である。ただし、ABB型形容詞におけるBBという部分は、本来擬音語として用いられる可能性があり、何らかのプロセスを通して安定した形容詞になったと考えられる。このプロセスを解明するために、「气呼呼（ものすごく怒っている）」、「臭烘烘（ぷんぷんにおう）」、「笑哈哈（声を上げて笑う）」という三つの語を例に説明を進めていく。

まず語構成の視点から見ると、「气呼呼」は「气＋呼呼」によって構成され、接尾語の「呼呼」は本来風や息の音を表す擬音語として使用されている（(8) と (9) を参照）。

(8) 春天风又大、吹得呼呼地响。（春は強い風がピューピュー吹きぬける。）
(9) 肥灌肠一样的两个指头、夹着烟卷、不住地呼呼吹着上边的烟灰。（太いソーセージのような指に巻タバコをはさみ、ひっきりなしにふかしている。）

その後、「呼呼」の前に品詞「气」が付き、接尾語になった「呼呼」は擬音的な意味が希薄化し、風や息の激しさ、更にメタファーを介して怒りの激しさを表すようになり、「气呼呼」全体は「ものすごく怒っている」という意味になった（(10) と (11) を参照）。

(10) 周永振气呼呼地说：“您猜得一点不错。……”（「そうだ、それにちがいねえ。」周永振がプリプリしながら口をはさんだ。）
(11) 哥哥推他、也不再挣着、就气呼呼地进了屋。（かれは兄に押されるまま、カッカッしながら家に入った。）

このように、「（气）呼呼」の擬態語化のプロセスは以下の図７で示すことができる。

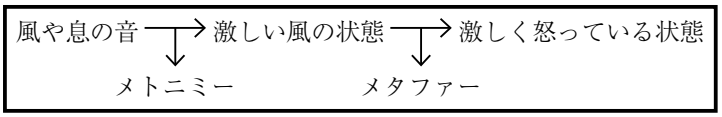

図７　「（气）呼呼」の意味拡張のプロセス

また、「（气）呼呼」と同様の擬態語化のプロセスを持つABB型オノマトペの一般的な擬態語化のプロセスは以下の図８になる。

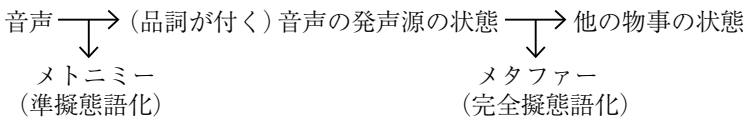

図８　パターンG

次に、「臭烘烘」について分析していく。接尾語「烘烘」は本来火が盛んに燃えている音を表す（(12) と (13) を参照）。

(12) 一阵风过、遍地的枯草、烘烘烧着。（一陣の風に吹かれると、あたり一面の枯草がぼうぼう燃えている。）
(13) 他发现到他的棚屋已被火烧为灰烬、烘烘的烟火弄到半边天都是黑的。（自分の小屋が燃やされて灰になってしまったことに気づいた。ぼうぼう燃えている炎と煙は空を半分黒くした。）

その後、擬音語の「烘烘」の前に品詞「臭」が付くと、接尾語になった「烘烘」の擬音的な意味が希薄化し、火が盛んに燃えている時の猛烈さがメタファーを介し臭さの強烈さを表すようになった（(14) と (15) を参照）。

(14) 臭烘烘的烟她终于吸完了。（臭い安タバコをついに吸い終わると、…）
(15) 我就不许你混身臭汗、臭烘烘的上我的炕！（汗臭いからだ横にはいってこられるのなんかまっぴらだ。）

このように、「(臭) 烘烘」の擬態語化のプロセスは図９の通りである。

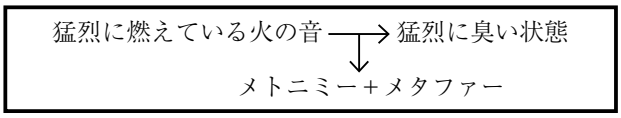

図９　「(臭) 烘烘」の意味拡張のプロセス

「(臭) 烘烘」の意味拡張のプロセスは、「(气) 呼呼」と似たようなものに見えるが、「呼呼」が「(气) 呼呼」に擬態語化された後、「呼呼」という音を発する物事の状態も伴っているため、「(气) 呼呼」の意味拡張のプロセスにおいて、音声から発生源に焦点が移らなければ、さらに抽象的な心理状況を表す怒りや感覚の激しさに意味拡張することはできない。それに対して、「(臭) 烘烘」の意味拡張のプロセスには、「烘烘」は火が燃えている様子という「烘烘」の発声源の様子に焦点が移る過程がすでに概念化され、火が盛んに燃えている時の勢いだけが捉えられ、品詞「臭」が付くことによって、激しい匂いに意味拡張することになる。メトニミーを介する焦点シフトの過程は既に概念化されたため、例文から見れば、音声と状態の両方を表す場合は存在しない。したがって、「(气) 呼呼」は焦点シフトによって、非常に怒っているという感情の激しさを表すのに対して、「(臭)烘烘」は発声源の様子に焦点が移るプロセスが概念化されたため、直接音声から盛んに燃えている火の勢いを捉え、激しい匂いの勢いを表すことになる。「(臭) 烘烘」と同様の擬態語化のプロセスを持つABB型オノマトペの一般的な擬態語化のプロセスは以下の図10のようになる。

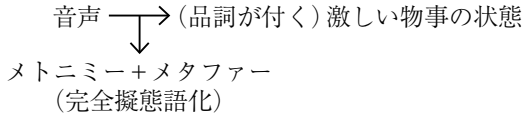

図10　パターンH

最後に、「笑哈哈」を例に分析する。接尾語「哈哈」は本来笑い声を表す擬音語である（(16)(17) を参照）。

(16) 我初一听、老魏头真有两把刷子呀、敢情减了一扁担！哈哈……（聞いたとたんに魏じいさんうまいもんだと感心したよ。天秤棒でなぐられた回数を一回減らしたりしてさ！ハハハハ）
(17) 余占鳌从劈柴堆里跳起来、手舞足蹈地大喊：“是老子的！哈哈！是老子的！（余占鰲がたきぎの山からはね起きて、こおどりしながら大声で叫んだ。「俺のだ！ハハー！俺のだぞ！」）

その後、「哈哈」の前に「笑」が付き、「哈哈」は接尾語になり、口が開いているという笑う時の様子に焦点が移る。ただし、焦点が移った後、本来の「笑い声」そのものも残っている（(18) と (19) を参照）。

(18) 他整天笑哈哈的。（彼は一日中にこにこしている。）
(19) 孩子们一边跑、一边笑哈哈地打闹。（子供たちは楽しそうに笑いながら駆け回っている。）

例 (18) と例 (19) から分かるように、「(笑) 哈哈」は「にこにこしている様子」を表すだけではなく、この人は普段よく笑っていることや、この人からよく笑い声が聞

こえることなどのイメージも持っている。したがって、「(笑) 哈哈」の擬態語化のプロセスは図11に示すことができる。

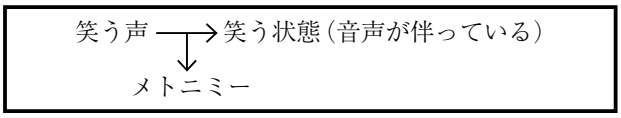

図11　「(笑) 哈哈」の擬態語化のプロセス

図から分かるように、「(笑) 哈哈」の意味拡張のプロセスは日本語の「ぐーぐー」と似ている。また、「(笑) 哈哈」と同様の擬態語化のプロセスを持つABB型オノマトペの一般的な擬態語化のプロセスは以下の図12となる。

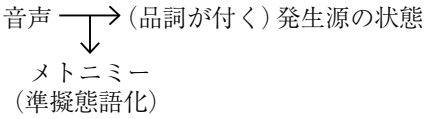

図12　パターンI

その後、残りのABAB型オノマトペ両用語について詳細な分析を行った。分析結果は以下の表８にまとめた。

表８　中国語ＡＢＢ型形容詞における擬音語の擬態語化のパターンと例

	パターン	例
G	音声 → （品詞が付く）音声の発声源の状態 → 他の物事の状態 ↓ メトニミー（準擬態語化）　↓ メタファー（完全擬態語化）	(气) 呼呼
H	音声 → （品詞が付く）激しい物事の状態 ↓ メトニミー＋メタファー（完全擬態語化）	(臭) 烘烘
I	音声 → （品詞が付く）発声源の状態（音声を伴う） ↓ メトニミー（準擬態語化）	(笑) 哈哈
J	音声 → （品詞が付く）発声源の状態（音声を伴わない） ↓ メトニミー（完全擬態語化）	(紧) 巴巴
K	他のパターン	(傻) 乎乎[5]

７．日中擬音語の擬態語化の対照

本節では、前節の表７と表８にまとめているＡ～Ｋのパターンに基づいて、日中両言語における擬音語の擬態語化の共通点と相違点について考察する。

7.1　共通点

各パターンにおけるオノマトペの例の量を計算したところ、日中両言語のいずれにおいても、擬音語はまず音声から発声源に焦点が移り、その後、発声源の状態などに似ている他の物事の状態などに意味拡張する、というパターン（ＡとＧ）の例が最も多く見られた。具体的には、抽出した日本語ABAB型オノマトペ両用語は49例あり、全体の57.65％を占めているのに対し、中国語ABB型形容詞は26例があり、全体の44.83％を占めている。ＡとＧの例が最も多い理由としては、ほぼ同様の身体構造を持つ人間はあまり異ならない方法で世界を認識し理解するからであると考えられる。実際に、擬音語の擬態語化は、本質的にはメタファーやメトニミーを介して抽象的な物事の状態や性質を、相対的に捉えやすいもの（音声）を通して認識する認知プロセスであると言えよう。

7.2　相違点

日中両言語における擬音語の擬態語化のプロセスを対照したところ、３つの相違点を発見した。一つ目は、日本語ABAB型オノマトペ両用語における擬音語の擬態語化においては、意味拡張の時に音声を伴う場合が多く、いわば、音声への依存性が高いのに対し、中国語ABB型形容詞における擬音語の擬態語化では、意味拡張された後殆ど音声を伴わない（パターンB、D、H、Jを参照）。二つ目は、日本語ABAB型オノマトペ両用語の意味拡張は語の形が変わらずに意味が拡張されるのに対して、中国語

ABB型形容詞には、接尾語BBの前にBBの意味を拡張させるほかの品詞が付かなければならない。三つ目は、日本語の擬音語が擬態語化された後、擬態的な意味は擬音的な意味によって決められ、細分化される傾向[6]があるのに対し、中国語の擬音語が擬態語化された後、擬音的な意味がほぼなくなり、擬態的な意味はある程度前に付く品詞によって決められ、包括的な傾向[7]が見られる。例えば、「ばりばり」と「ひりひり」は擬音的な意味が似ているが、擬態語化された後、意味が異なるようになる。その一方で、中国語における「呵呵」は笑い声を表し、前に品詞「笑」が付いて擬態語化された後、「笑呵呵」になると、にこにこしているという意味になるのに対して、「呵呵」の前に品詞「傻(とぼける)」をつけると、とぼけた様子を表すことになる。

上述の相違点の要因としては、二つある。一つ目は、先行研究で触れた野口(1977)の主張の通り、中国語の語彙化程度は日本語より高いためであると考えられる。言い換えれば、中国語には擬音語そのものが意味拡張し、擬態語になるという過程がなくても、状態や様子を直接に表せる語彙が多くあるということである。二つ目は、中国語は、日本語は擬音語から焦点シフトを通して擬態語になることのように、意味拡張することはできない。なぜなら、文の意味を曖昧にする可能性があるからである。例えば、いびきを表す日本語の擬音語の「ぐーぐー」と中国語の「呼呼」は音声から寝ている状態に焦点が移り、日本語では「委員会などの集まりでもすぐぐーぐーやりだし、…。」と言えるが、中国語では「就算在委员会上也立刻呼呼起来……」と言うと、意味が不自然である。より自然的な言い方は「呼呼」を限定する動詞「睡(寝る)」を付け、「就算在委员会上也立刻呼呼睡起来……」というような文である。この要因としては、一つの日本語の擬音語は音声を表す意味が少ないため、直接擬態語になっても文脈によって意味が判断できるが、中国語の擬音語は音声だけを表す意味がいくつかもあるため、直接擬態語化されると、コンテクストによって、意味の判断ができない場合もある。したがって、中国語の擬音語はまず接尾語になり、ほかの品詞が前に付くことによって、意味が限定される。意味を限定するとともに、接尾語の意味が希薄となり、付いた品詞によって支配され、擬態語化した後、接尾語としての擬音語の意味は包括的になる。

8．終わりに

オノマトペや形容詞は表現力に富み、ことばに色彩を添える機能を持ち、どの言語にも必要不可欠な存在である。本稿では、日本語のABAB型オノマトペ両用語と中国語ABB型形容詞における擬音語の擬態語化について対照した。その結果、いずれの言語においても、擬音語はまず音声から音声を発する発声源に焦点が移り、更に、発声源の様子や状態と似ているほかの物事の様子や状態などに意味拡張する、というような擬態語化のプロセスが最も多いことが明らかになった。また一方、日中両言語における擬音語の擬態語化について次の三つの相違点があることも分かった。①擬音語の擬態語化のプロセスにおいては日本語のほうが中国語より音声への依存性が強い。②日本語ABAB型オノマトペ両用語の擬態語化のプロセスでは語の形は変化しないのに対して、中国語ABB型形容詞には、ほかの品詞の接尾語BBの意味を希薄化させ、さらにBBと結合して擬態語化を成し遂げる。③擬態的な意味は、日本語では擬音的な意味により決められるが、中国語ではある程度その前に付く品詞により決められる。

本稿では日中両言語のオノマトペにおける擬音語の擬態語化のプロセスを明らかにしたが、今後の課題としては、日本語におけるABAB型の擬態語の意味拡張に関する解明、また、中国語ABB型形容詞以外の形容詞における擬音語の擬態語化についての分析が望まれる。

---

[1]擬音語の擬態語化：武田(2001)を参照。

[2]本稿の研究対象としての日本語ABAB型オノマトペ両用語とは、安定した擬音的な意味と擬態的な意味の両方を持つオノマトペを指す。そのため、擬態的な意味だけを有する擬態語、及び擬音的な意味に加え、場合により不安定な擬態的な意味も持ている擬音語は、研究対象としない。

[3]なぜこのような焦点シフトが起きたかと言えば、次のような主張から分析を試みる。苧阪(2007)によると、「擬音語表現は聴覚、擬態語表現は主として視覚由来である」、また、矢口(2011)は「修飾語として、低次感覚から高次感覚への修飾が理解可能である」と述べている。共感覚理論における、聴覚は視覚より低次的な感覚であり、また、視覚の範囲は五感において最も広いため、ほかの感覚から視覚に移りやすいと考える。従って、聴覚で音声を捉えるとき、視覚も同時に働いており、しかも、視覚は聴覚より高次的な感覚であるので、聴覚を表す音声から物事の状態を表す音声の発声源に移ること、言い換えれば焦点シフトは起りやすい。本稿の研究対象としての日本語ABAB型オノマトペ両用語とは、安定した擬音的な意味と擬態的な意味の両方を持つオノマトペを指す。そのため、擬態的な意味だけを有する擬態語、及び擬音的な意味に加え、場合により不安定な擬態的な意味も持ている擬音語は、研究

対象としない。

[4]パターンＦに挙げられた「びりびり」の意味拡張はパターンＡとパターンＤの両方を持っている。

[5]表８が示しているように、パターンＫはG、H、I、Ｊとは異なり、「乎乎」は古代中国語の機能語「乎」から変遷され、擬音語から由来するものではないという可能性もある。

[6]細分化する傾向：日本語ABAB型オノマトペ両用語における擬音語が擬態語化されるときに、一つの擬音的な意味は一つの擬態的な意味と対応している。

[7]包括的な傾向：中国語ABB型お形容詞における擬音語が接尾語になると、前に複数の品詞が付けられ、一つの擬音的な意味は複数の擬態的な意味と対応している。

参考文献：

相原茂・韓秀英（編）（1990）『現代中国語ABB型形容詞逆配列用例辞書』くろしお出版

浅野鶴子（編）（1978）『擬音語擬態語辞典』角川書店出版

阿刀田稔子・星野和子（1995）『擬音語擬態語使い方辞典－正しい意味と用法がすぐわかる（第２版）』創拓社出版

天沼寧（編）（1974）『擬声語擬態語辞典』東京堂出版

石黒圭（2008）「オノマトペとは」『国文学』10：pp.24－32

伊東真美（2009）「日本語の擬態語の音象徴について－認知言語学的視点から」『芸術工学研究』11：pp.19－35

有働真理子（2002）「オノマトペから学ぶもの」『兵庫教育大学研究紀要』22：pp.13－21

大澤（伊藤）理英（2007）「オノマトペの意味拡張の事例に基づく共感覚的比喩表現の一方向性における反例と考察」『日本認知言語学会論文集』7：pp.365－374

沖田知子（1996）「音象徴とオノマトペ」『言語文化研究』22：pp.27－41

苧阪直行（2008）「感性の認知脳科学－擬音語・擬態語の脳内表現」『国文学』10：pp.50－57

小野正弘（編）（2007）『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館出版

角岡賢一（2007）『日本語オノマトペにおける形態的・音韻的体系性について』くろしお出版

金田一晴彦（1978）『擬音語擬態語辞典』角川書店出版

瀬戸口律子（1984）「擬音語擬態語表現（日本語・中国語）について」『大東文化大学紀要人文科学』22：pp.1－17

武田みゆき（2001）「中国語にみる共感覚比喩についての一考察－擬音語の擬態語化をめぐって」『ことばの科学』14：pp.107－118

田守育啓（1991）『日本語オノマトペ研究』神戸商科大学経済研究所出版

田守育啓・スコウラップ（1999）『オノマトペ－形態と意味』くろしお出版

野口宗親（1977）「中国語擬声語の特質について」『熊本大学教育学部紀要人文科学』26：pp.15－24

野口宗親（編）（1995）『中国語擬音語辞典』東方書店出版

野間秀樹（2008）「音と意味の間」『国文学』10：pp.58－69

矢口康幸（2011）「オノマトペをもちいた共感覚的表現の意味理解構造」『認知心理学研究』8（2）：pp.119－129

呂佳蓉（2004）「比喩としてのオノマトペ－『ころころ』と『圓滾滾』」『日本認知言語学会論文集』4：pp.480－483

中国社会科学院语言研究所词典编辑室（编）（2008）≪现代汉语词典（第五版）≫商务印书馆出版

鲍海涛（1985）＜谈ABB式形容词及其后缀＞≪齐齐哈尔师范学院学报（哲学社会科学版）≫3：pp.72－77

戴丽（1999）＜ABB类形容词的构成要素及其性质＞≪社科纵横≫1：pp.67－69

郝文华（2006）＜关于ABB式形容词构词方式的思考＞≪现代语文（语言研究版）≫7：pp.41－42

郝文华（2006）＜ABB式形容词的构词方式＞≪科教文汇≫9：pp.60－61

郝文华（2007）＜ABB式形容词A与BB的关系＞≪湖北民族学院学报（哲学社会科学版）≫4：pp.113－116

李劲荣（2006）＜ABB式状态形容词的量级表现及其成因＞≪宁夏大学学报（人文社会科学版）≫4：pp.87－91

李劲荣（2008）＜ABB式形容词的构成方式＞≪赣南师范学院学报≫1：pp.16－23

邵敬敏（1990）＜ABB式形容词的动态研究＞≪世界汉语教学≫1：pp.19－26

申跃（2006）＜浅谈ABB式形容词的结构及特点＞≪语文学刊≫22：pp.123－124

薛玉萍（2005）＜通过义素分析看ABB型形容词＞≪语言与翻译≫4：pp.37－41

辛尚奎　周成（1989）＜试论ABB式形容词＞≪内蒙古大学学报（哲学社会科学版）≫4：pp.101－107

杨国学（1999）＜形容词“ABB”结构的修辞特点＞≪当代修辞学≫1：pp.18－19

祝东平　刘兰玲（2001）＜ABB型形容词的结构＞≪东疆学刊≫18（1）：pp.88－89

A Contrastive Study on the Mimeticization of Onomatopoeic Words in Japanese and Chinese:Focusing on the Japanese ABAB Type Onomatopoeia and Chinese ABB Type Adjectives

Yinqiu ZHAO

On the onomatopoeia, there are a large number of studies from the perspective of rhyme, morphology, etc. But few studies have been done from the perspective of cognition. In this paper, the process of the mimetic words being made from onomatopoeic words in Japanese ABAB type onomatopoeia is compared with Chinese ABB type adjective from the perspective of cognition. The results are as follows: in both languages, the same process can be observed, that is onomatopoeic (adjective) words shift focus from the sound to the sound source first, then they are extended to describe the appearance and state of other things that look like the sound source. It is also one of the most common process. However, following differences are also found. (1) In the process of creating the mimetic words, the dependency on the sound of Japanese onomatopoeic words is stronger than that of Chinese adjective words. (2) The meaning of Japanese ABAB type onomatopoeia will extend without changing the form of words.But in Chinese ABB type adjectives, before the suffix BB,there must be some words which will cause the meaning of BB suffix to extend. (3) The meaning of mimetic words is decided by the onomatopoeic words in Japanese, but in Chinese, it is influenced by the word that combines with the adjective word.